

中島敦の世界

榎林 混 二

人の性情には幾つかの類型がある。そのうちで、中島敦は自身に二つの病弊があったという。一つは虫疾、他の一つは狼疾である。

虫疾とは何か。

彼は韓非子の次のような句を引く。「虫有虺者。一身兩口、争相齧也。遂相食、因自殺」。そして、次のようにも説明する。

「身体を二つに切断されると、直ぐに、切られた各々の部分が互ひに闘争を始める虫があるそうだが、自分もそんな虫になつたやうな気がする。といふよりも、未だ切られない中から、身体中が幾つにも分れて争ひを始めるのだ。外に向つて行く対象が無い時には、我と自らを噛み、さいなむより、仕方がないのだ。」

〔「かめれおん日記」〕

虫疾とはそんな病だと中島はいう。虺とは蝮である。中島の腹中には蝮虫がいたことになる。蝮虫とは何か。彼は「山月記」の中でそれを「尊大な羞恥心」、「臆病な自尊心」と言いかけている。なまじっか幼少より持っている矜持のために自分で自分の自在な行動をおさえてしまうのである。行動の判断を他にまかせ、他者が己れをどうみるか、どう考えるか、それを自分の行動の基準とし、その中でいつも競々として、他に唾われまい、他に卑しめられまいとしているのである。

例えば、幼い頃、試験の結果を尋ねられると、彼は必ず、自分の予想よりも悪く答えるのを常としていた。「自惚屋」、「間違ひに気のつかない

頭の粗雑な男」と思われることが彼にとっては我慢できないからである。実際の成績が予想より悪くて、ナランダと笑われるのが「此上なく羞しかつた」のである。また、彼は自己の感動を卒直にあらわすことも恥ずかしく思う。死に類した祖父の手を握り、その澄んだ美しい眼にぶつかった時、不思議な感動が身体中をつきぬけていくのを感じる。しかし、その一時の感動がすぎると、すぐにそれが気着かしく思ひだされ、忌々しくなってくるのである。

〔「斗南先生」〕

したがって、何事につけても感動できないことになる。感動は自己の素朴、単純な露出であり、それは彼には耐えられないからである。その結果、彼はすべての夢を断つ、あるいは断とうと試みる。あらゆる感動に対する耽溺を拒否しようと試みる。そして、ついには自己の心情にのみこだわったじめじめとした嫌な男になっていくのである。

虫疾とはそんな病をいう。

現実の夢を断つというのだから、それでは俗世間を超越した男になるのかという決してそうではない。国漢の老教師に大袈裟に褒められると、彼の尊大な自尊心は、不思議なほどよろこばされる。「杜燐川もセザール・フランクもスピノザも填めることのできない孔^{あな}が、一つの譚辞、一つの阿諛によつて忽ち充たされる」〔「狼疾記」〕、それが彼にとって驚きでもある。

彼はそういった矛盾する自己について次のように自責を試みる。

「行動能力が無いために、世の中から取残されてあるだけのことぢやないか。世俗的な活動力が無いといふことは、それに、決して、世俗的な欲望が無いといふことではないんだからな。卑俗な欲望で一杯のくせに、それを獲得するだけの実行力が無いからとて、いやに上品がるんざあ、悪い趣味だ。追ひつめられた孤立なんぞは少しも悲壯でなんかありはしない。」

（「狼疾記」）

こうした自己呵責と自己嫌悪にさいなまれながらも、結果として彼は何一つ行動できないのだ。動けないことが自己の唯一の所為とも思うからである。

その彼にとって、観念や抽象をもてあそばさないで、つねに生々とした行動力を持つ人々はうらやましい。行動と美用の権化、恥も外聞もなく物質的で、懷疑、羞恥、「てれる」といった気持と全く縁遠い国語教師の吉田、高等教員検定試験に合格し、有頂天になって喜ぶK君（「かめれおん日記」）、自分の妻が載った「日本名婦伝」という書をみせて喜悅を洩らすM氏（「狼疾記」）、およそ、抽象思考の全く欠如した行動の権化トムソン（「北方行」）、そして、完全な没自我の中に飛翔できる、実行の天才、孫悟空（「悟浄歎異」）、こういった存在は、彼にとって半ばの蔑視と、半ば以上の景仰的である。時として、それらに対して、不思議な依存の心さえ起こるのである。

非力な自己の無行為性とその正当化、自己の底に流れる、俗悪な願望、そういう自己の心情がわかればわかるほど、その心情は奇妙な自縛の繩となり、彼はますます素直に、直情的に感動的に動けなくなっていくのである。その意味で彼は求道者であって認識者ではない。いつまでたっても限りのない合せ鏡の前に立っていることになるのである。

彼は、何とかここから逃がれようと試みる。「何事をも（身の程知らず

にも）永遠と対比して考へるために、先づその無意味さを感じて了ふのである。実際の対処法を講ずる前に、そのことの究極の無意味さを考へて（本当は感ずるのだ。理窟ではなく、アツマラナイナアといふ腹の底からの感じ）一切の努力を抛棄して了ふのだ。」（「かめれおん日記」）

彼はこのように、つねに、問題を無限と対置させることによって、自己の無行為性を正当化しようとする。自己の卑劣な性癖を分析したのち、何とかそれをのりこえていく手段を探し求める。すなわち、こういった自己内閉の癖をのりこえるため、何とか自己の惨めさの意味を転化しようと同様に試みるのである。その手段の第一としてまずあげられるものは、逆に、その内閉そのものにひたりこもうと考えることである。自己内閉をのりこえられないとしたら、それに徹してみればいいじゃないかと彼は思う。例えば、外へ向って開かれた器官を総べて閉じて、石になろうと思う。

「石となれ石は怖れも苦しみも憤りもなけむはや石となれ

我はもや石とならむず石となりてつめたき海を沈み行かばや」

（歌稿）和歌でない歌（「

また、例えば、「自分の位置を知り、自己及び自己の世界の下らなき、狭さを知悉してある絶望的な金魚」（「かめれおん日記」）といった形で、金魚鉢の中の金魚に自己の心情を托したりもする。

しかし、すぐに、これではいけない、これでは生存の意味はなくなる、とも思う。自己内閉からの抜け道を探そうと努める。何とかしなければならぬ。「もつと我執をもて我欲^{エグスケルシヤリイ}排他的に一つ^ニの事に迷ひ込むことが唯一の救だ。」（「かめれおん日記」）。彼は、このような、自己を没却した行動に救いを求めようとする。願いの対象は何でもいいのだ。とにかく盲目的に行動することである。これが第二の手段である。歌稿の中でも次のようにうたう。

「ある時はファウスト博士が教へける行為ギョウによらで汝は救はれじ」

(「和歌でない歌」)

しかし、事実としては、何一つ動けないのである。それは、彼自身も、はつきり自覚しているのだ。虫疾とはこのように、自我の中で常に左右に振幅する無行為性の症状をいう。

いま一つの病弊、狼疾とは何か。

彼は、孟子の次の句を引く。「養其一指、而失其肩背、而不知也、則為狼疾人也」。この狼疾について武田泰淳氏は次のように説明される。

「狼疾とは『指一本惜しいばかりに、肩や背まで失ふのに気がつかぬ、それを狼疾の人といふ』と孟子にある言葉である。指一本とは中島の自我であり、その自我にこだわる文学的状态である。肩や背とは生活体としての中島の全存在であり、また彼がまさにそこに自分の外にあると目する文学、悟空的自由と三蔵的広大さを持つ文学である。」

(「中島敦の狼疾について」昭23・12)

私なりにいいかえれば、氏のいわれる「自我」とは、前にのべた虫疾と違っていいように思われる。自己にこだわり、じめじめと内にこもってしまふ、それが指である。彼はそれにこだわる、認識論のあたりをうろうろする。それが彼を虎にしてみるのである。虫疾の結果、彼には普通の、原因、結果が直接につながるといった直線的な思考ができなくなるのだ。自分は虫疾からぬけ切れない、それなら、それに徹するよりしかたがないじゃないか、彼はそのように考えを進めていく。すなわち、自己のじめじめした心情が自分の本来の性情なら、それに徹して動くより他にないじゃないか、そう決意したようにみえる。いいかえれば、己れの愚かさが指で、他の可能性が肩かもしれない。

例えば、彼は彼の直面する問題、「通常の人ならもう卒業しているはず」の、人々には愚かと思えない志向へ強引に考察を進めていく。それを「存在の疑惑」「漠然とした不安」という形で彼はのべる。

「それが今ある如くあらねばならぬ理由が何処にあるか？もつと遙かに違つたものであつていい筈だ。おまけに、今ある通りのものは可能の中の最も醜悪なものではないか？」

(「狼疾記」)

彼は、何かにつけて、そう疑い迷う。

ある料理店でみた男の顔のつけねにあった瘤、その男の意志を完全に無視した、宿主の眠っている時でも、それだけ秘かにめざめて晒っているようなその醜い寄生物に、得体の知れない不快と不安をもって、人間の自由意志の働き得る範囲の狭さを思いやるのである。また、小学校の時に聞いた地球の運命の話、太陽が消えた真黒な空間をぐるぐると黒く冷たい星共が廻っているという話などを思い出すと、不安と恐怖でたまらなくなっていく。そして、「このような、人類や我々の遊星への単純な不信が、もはや観念としてではなく、感覚として、彼の体内の中に住みついて了つたのではないか」(「狼疾記」)と思ひ疑う。

「これがほんの僅かでも聞えて来るかぎり、あらゆる幸福も名誉も、制限付きの名誉、幸福でしかない。」

(「狼疾記」)

そう思うにつけても、彼はこういった不安から逃げようというる努力する。この不安が解消されるのは「形而上学的迷蒙の形而上学的放棄」(「狼疾記」)でしかない。その苦しみが観念の苦しみである以上、観念的にこえなければならぬと思ふのである。しかし、しよせんそれではどうにもならない。結局、彼は次のように自分で自分に言い聞かせる。

「俺が斯うした莫迦げた事柄への貪婪を以て(しかも哲学的な冷徹な思索を欠いて)生まれてゐるといふことこそ、唯一のかけがえのない所与な

なのだ。結局各人は各様に其の素質を展開するより外に手はない。……女や酒に身を持ち崩す男があるやうに、形而上学的貪慾のために身を亡ぼす男もあらうではないか。」

〔狼疾記〕

こうして、彼はその形而上学の中に身を投げかけていこうと決意する。虫疾に身をもち崩すこと、自己をそれに没入することをより、自己の他のすべての可能性を棄てようとするのである。この心の動き、こういった一つのものにこだわってすべてを決定する彼の性情が彼のいう狼疾であろう。そして、中島は完全に狼疾を患ってしまうわけである。

芥川龍之介が「細身の剣」をひきさげて「ぼんやりした不安」に突きすすんだように、北村透谷が「空の空なるもの」に対したように、中島は「畢竟、俺は俺の愚かさに殉ずる外に途はないぢやないか」(「狼疾記」)と思うのである。

心理学的に言えば、虫疾は防衛機制 (Defense Mechanism) という単なる理窟づけ (Rationalization) にすぎないかもしれないし、狼疾も結局は、ローゼンツヴィクがのべる、自我防衛 (Ego-defensive) 的な行動にすぎないかもしれない。誇り高い自我や、自己の全体をかけて保持してきた自信の喪失、あるいは見栄のために、責任を他の何かに転嫁したり、自責したりする、ごく普通の行動にも思える。それは、必然的に、本来の目的とずれた代償行為を求めたり、現実においてみだされぬ願望を、空想や、それとは全く関係のないもので補う場面逃避を行ったりもする。例えば、彼はエキゾチズムに走り、ディレクタントを詠歌し、「レオパルデイの羽を少し。シヨペンハウエルの羽を少し。ルクレティウスの羽を少し。莊子や列子の羽を少し。モンテニエユの羽を少し、何という醜怪な鳥だ」(「かめれおん日記」)と教養の世界をさまよう。

結局、それは自我防衛の一つとして片づけられる問題のようにも思われる。しかし、問題はともそこでも止まらない。少し違うように思う。今少し考えを進めてみたい。

二

中島の本質の中には、そういった心理学的な処理を通して、その枠からはずれるいま一つ重要なものを感じられる。結論から先にいえば、それは、その、異常な固執度である。中村光夫氏が「観念の遊戯」(「中島敦論」昭18・12)と評される、自己と自己の精神への固執、それが重要であるように私は思う。問題はここから始めなければならぬ。

そのために考えられる彼の精神の内質追求として、二つの方法がある。一つは虫疾や狼疾にかかる、その病因の追求であり、今一つは虫疾、狼疾に対する、彼のとった療法である。この二つを追求することが、ひいては中島敦の世界の解明につらなるように私は思う。

まず、前者から考えていきたい。すなわち、虫疾の原因は何であろうか。「尊大な羞恥心」と「憶病な自尊心」とは何か。

「山月記」は、「隴西の李徴は博学才穎、天竺の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられ」の句で始まる。李徴は才あるため、己の珠なるを信ずるため、「賤吏に甘んずるを潔し」としない。中島の友人湯浅克衛の回想(「敦と私」)によると、中島は京城中学校においては、開校以来の秀才であったという。そして、その後、一高、東大を出た中島は志を得ぬままに、病苦に冒かされ、地方の一私立女学校の教師になってしまう。それは中島の自尊心を如何に傷つけたことであろう。

友人の小山政憲の回想(「中島敦の思ひ出」)は次のように語る。「中

島教は、京城中学四年を終ると、一高へ去っていった。中島の一高入学は、私たちの間では少しも驚異でも讃嘆でもなかった。しかし彼の去った後の一年は一つの虚ろな空洞が出来たようであった。」そして、小山たちが教室で教師にやりこめられるとき、いつも引きあいに出されるのは中島の名であった。恐らくそれは、中島の全身にやきついていっている栄光であろう。

そしてまた、小山のこの回想の最後にはこんな一文もある。

「大学は英文科に進むかと思っていたら国文科で、その後横浜女学校にいたのを知った時は、何となく期待を裏切られたような怪しい気持であった。」

これは中島の屈辱でもあったろう。

また、「教は、その頃、文壇に登場した大学の後輩たちの活躍を、気にして居た。『君、彼らほどの才能でも、努力すれば、これ位にはなれるんだ。』その後輩の文章の載った文芸誌を示しながら、そう洩したことがある。彼にあせりのあることを察した。」とは、横浜高女の教師時代の同僚山口比男の回想（「十二月六日まで」）である。ここにも中島の心情の一端がある。

今一つ例を引こう。南洋庁時代、妻たかにあてた書簡の一部である。

「船の中で、文芸春秋の九月号（パラオではまだ見られなかった）を見たら、土屋（朝日新聞にゐる男さ。何時か話したらう？）が座談会に出て、しゃべつてゐる。

前月（八月）号の座談会には吉田（精一）が出てゐる。皆さん、お賑やかなことだよ。」（昭和十六年九月二十八日付）

かくして、「山月記」の原形は、中島の意識の世界の中にできあがっている。彼は「産を破り」狂う。虫疾の一因はこれであると思う。彼の「尊大な羞恥心」「臆病な自尊心」は俗人と行を共にするにはあまりにか弱く、

あまりにはこり高い。そして、その底にある心情はあまりに俗に近い。それが自己の心の中に存在するのが、よくわかるだけに彼は動けなくなるのである。彼の虫疾の病因の一つはそこにあるといえよう。

しかし、原因の綫てをそういった単なる挫折の過程に求めるには、この自我の矜持や羞恥の尊大さは、少し異常にすぎる。他の原因があるように私には思える。「羞恥」といい、「自尊」という、その原因は何だろうか。どうやら中島の本質はその原因の追求と共にあらわれるように思う。

ここでも、また結論から先にのべよう。「羞恥」とは、他人に自己の欠落を見取られるのを嫌う心情である。あるいは、自己の浅薄さを見抜かれることを深きよしとしない心の動きである。「自尊」とは、その中で左右にゆれ動く心情の振り子の中心である。「自尊」の程度によって、「羞恥」の振幅はその大きさを決定するのだ。

それでは、こういった、自らが自らの行為を恥する心情は一体何だろうか。これは、単なるモラルというにはあまりに軽薄に思われる。それはもつと毅然とした意志の力をもつ。儒教倫理としてかたげざるものは、ふに形骸化した定義に墮す。それはもつと異質の多くの要素を保持しているようだ。私はそれを、かりに「士」の意識と名づけてみたい。そしてその「士」の意識を彼の無行為性の一因と考えたいのである。

下吏となって俗悪な大官の前に屈するのを潔しとしない意識の動きの底に、もつと毅然とすわっているのは、信義、廉恥、礼儀、名譽、そして、そういう意識を継いで流れる、ある緊張した精神の律動としての、「士」の意識のようなものではないだろうか、私はそのように思う。

もうすこし論をすすめてみる。私のいう「士」の意識は様々の内的要素をもつ。今、仮りにそれを三つの要素に分けて考えてみたい。すなわち、第一には恥の意識、第二には義の意識、第三には正直の意識である。そう

した諸要素のからみあい、彼の虫疾を起し、狼疾への転移をもたらしたのではないだろうか。

最初からみていきたい。虫疾の病因として、先に私は自己の卒直な感動の動きを自制することをのべた。たしかにそれは極度の自意識の所産には違いない。それはまちがいない。しかし、単にそれだけでは、病因の今一つの要因として、加えてみたいのがこの恥の意識である。例えば、「北方行」の中で、彼は、次のように自戒を主人公三造の口をかりて行なう。

「生に対する激情が、後悔と羞恥とを以て扱はれなければならないことは、一体何といふ事だろう。恐らくは、これも、物に動じない事を以て修養の要諦とした東洋的教育の残滓かもしれない。とにかく、彼にあつては、一時感情の興奮を以て考へたことは、あとで必ずその反動として否定され、羞恥を以て思返されるのだ。」

物に動ずる動じないは問題でない。物に動じたのを人に見透かされるのが問題なのである。彼の意識の中核はその思いなのだ。坂をころがりおちる蜜柑を必死で追いかける同僚の吉田が彼にとつては驚異である。「（「かめれおん日記」）しかしまた、決して彼にはできない行為でもあるのだ。この感情の発生する、その源には、感情耽溺を恥とする意識、軽薄な心の動揺を厭う意識が明確に存在しているように思われる。これは、羞恥の一基本形態である。

また、この恥の意識は今一つの要素を持つ。例えば、李陵のために弁じて、官刑の宣告をうけた司馬遷は次のように苦しみ動哭する。

「同じ不具でも足を切られたり、鼻を切られたりするのは、全然違つた種類ものだ。士たる者の加へられるべき刑ではない。之ばかりは、身体のかういふ状態といふものは、どういふ角度から見ても、完全な悪だ、飾言の余地はない。」

「司馬遷は自分を男だと信じてゐた。文筆の吏ではあつても、当代の如何なる武人よりも男であることを確信してゐた。」（「李陵」）

その彼が、士として耐えるべからざる刑をうけ、その恥の中でもたえ苦しむ。刑を受けた苦しみや恨みではない、士にあわぬ刑を受ける苦しみなのである。このことは、例えば、「光と風と夢」の中で、R・L・ステイーヴンソンが、「……咯血の中にすら彼は自ら、R・L・S・式なものを見出して、些かの満足(?)を覚えてゐたのである。之が、顔の醜くもくんで来る腎臓炎だつたら、どんなに彼は厭がつたことであらう。」と記すことにもつながる。

病にさえ一つの矜持を持つ、これは、一寸、異様である。これは、本質的に、意識が作りだす姿勢の問題であつて、単なるスタイリストの問題ではない。この両者をあわせて、私は恥の意識としたいのである。

第二にいう義の意識とは何か。「弟子」において、子路を主人公にしてゐる所にそれを解く鍵の一つがある。徳行の顔淵、閔子騫、冉伯牛、言語の宰我、子貢、政治の冉有、文学の子遊、子夏、といった孔門の俊才、さらには、それより第一にあげるべき、すばらしい「中庸への本能」をもつた孔子をも傍役にして、中島敦が子路を主人公にとりあげたということ、そのことが、すでに、第一の、そして重要な問題なのである。

「飽く迄人の下風に立つを潔しとしない独立不羈の男」である子路が、孔子の前にゐる時だけは、すべてを忘れて、まるで母親の前にゐる幼児のように、思索や判断を孔子に任かせる。しかし、その子路にも次のような一つの矜持がある。

「だが、之程の師にも尚触れることを許さぬ胸中の奥所がある。此処はがりは譲れないといふぎりぎり結著の所が。」

即ち、子路にとって、此の世に一つの大事なものがある。其のものの前

には死生も論ずるに足りず、況んや、区々たる利害の如き、問題にはならない。快といへば稍々軽すぎる。信といひ義といふと、どうも道学者流で自由な躍動の氣に欠ける憾みがある。そんな名前はどうでもいい。子路にとつて、それは快感の一種の様なものである。」（「弟子」）
こういった、ほとんど本能的にも思える、義を重んずる彼の心情、これが子路の行動の中核をなす。師の孔子の中核が仁であるとしても、子路はこの点ではゆずれないのである。

こういった子路の世界は、儒教倫理で処理される世界ではない。この「弟子」という作品は昭和十七年六月二十四日に脱稿されている。ちなみに、下村湖人が「論語物語」を刊行したのは昭和十三年十二月であり、二作の形式、逸話の扱い方は、あまりに近い。何らかの影響関係が存在するようにも思える。

しかし、にもかかわらず、根本的に違うことは、「論語物語」が、あくまで孔子中心の「天の書」であるということである。天の道を説く孔子と、そのまわりに綺羅星のごとく群がる孔門の十哲。対して、中島の「弟子」はあくまで、子路中心の「人の書」である。今、ここに、もう一つ、谷崎潤一郎の「麒麟」（昭43・12）を持ってくれば、その特質は一層あざやかにうかがひあがってくると思う。「麒麟」は「天の書」でも、「人の書」でもない。「地の書」とでもいうべきであろうか。

試みに、孔門の一行と道士のやりとりを材をとって、この三つの作品の違いをのべてみたい。「麒麟」は次のように展開する。

師にうながされて、道士の話を聞きに行った子貢は、帰って、道士が、死と生は一度往って一度反るので、死は生につながり恐いものではないとのべ、悠々としていたと孔子に告げる。孔子は「なかなか話せる老人であるが、然し其れはまだ道を得て、至り尽きぬ者と見える」と、ゆったりと

これに反応する。話の中心は孔子であり、またのべられんとしているのは、孔子と子貢のやりとりや両者の心情ではなく、あくまで泰然として動かない孔子の姿勢なのである。聖人孔子の講筵に座して、弟子達が恐懼として聞いている。いとも独善的な孔子の姿なのだ。ここにおいては、すべての規範の中核は孔子にある。いかにも悟り切ったような姿の動かない悩まない孔子である。そして、この姿勢は、また、作者谷崎潤一郎の姿勢とも一致する。「此の言葉は、彼の貴い論語と云ふ書物に載せられて、今日迄伝はつて居る。」という一文でこの作品は終わるが、そこにも、気障っぽい才子然とした作者が姿をあらわして興をさます。

この作品の中心の話は、衛の靈公とその妃南子、そして孔子とのやりとりであるが、話の主眼は、南子の美しさ、かぐわしい香料、酒食の記載にある。如何に美しいか、如何に素晴らしいか。そしてその中で、寂寞とした孔子一行は、次第に光をそがれていく。そこには、すくなくも、耽美主義者谷崎の面目が躍如としている。これは、あくまでも「地の書」である。「論語物語」はどうであろうか。渡し場で孔子一行は道に迷う。近くの畑で働いていた百姓に道を聞きにいった子路は、その百姓が実は隠士で、今の、この泥々の世に渡船を求めたとて無理で、思い切ってこの世全体に見きりをつければ良いではないかととさされる。帰ってそれを話す子路に、孔子は次のように答える。

「山野に放吟し、鳥獸を友とするのも、なるほど一つの生きかたであるかも知れない。しかし、わしには真似のできないことぢや。わしには、それが卑怯者か、徹底した利己主義者の進む道のやうに思へてならないのぢや。わしはただ、あたりまへの人間の道を、あたりまへに歩いて見たい。つまり、人間同志で苦しむだけ苦しんで見たい、といふのがわしの心からの願ひぢや。そこにわしの喜びもあれば、安心もある。」

「わしに云はせると、濁つた世の中であればこそ、その中で苦しんで見たいのぢや。正しい道が行はれてゐる世の中なら、今頃わしも、かうあくせくと旅をつづけてゐはしまい。」

子路は、師のことは涙をうかべて聞く、隠士のことばに一寸でも心の動いた自分が恥ずかしく、孔子に心からわびたい気持ちになる。彼は、「人生の苦難を抱きしめて澄み切つてゐる聖者」の姿を、そこに見出すのである。美しい師弟絵図がここに展開されている。そして、その中核は、あくまで、中庸の人孔子である。孔子はいつも大きくふわりと弟子達をおつている。そこには倫理体系としての孔門一行の行動が示めされている。孔子の道は天の道にづらなるといえよう。

同じ構図を「弟子」でながめてみよう。孔子の一行に遅れて、一人そのあとを追つていた子路は、一夜を老人の隠者の家に過ごす。その邸内には、貧しき中に融々たる豊かさがある。老人父子の生活には、いかにも充ちたりた和やかさがある。その夜、今の世に周の古法を施そうとする孔門のやり方は、ちやうど、陸に舟をやるがときものだとか、猿狙に周公の服を着せてもしかたがないとか、老人は子路に向つて説く。反論を試みながらも、この老人父子の隠やかな生活を見るにつけて、子路は幾分の羨望を禁じえない。翌朝、老人の家を辞して、孔子一行の後を追ひながら、子路は老人と孔子を並べて考えてみる。

「孔子の明察があの老人に劣る訳はない。孔子の欲があつた老人よりも多い訳はない。それでゐる尚且つ己を全うする途を棄て道の為に天下を周遊してゐることを思ふと、急に、昨夜は一向に感じなかつた憎悪を、あの老人に対して覚え始めた。午近く、漸く、遙か前方の真青な麦畑の中の道に一団の人影が見えた。其の中で特に際立つて丈の高い孔子の姿を認め得た時、子路は突然、何か胸を緊め付けられるやうな苦しさを感じた。」

「麒麟」のいかにも夫子然とした孔子、「論語物語」の苦悩する孔子に對して、「弟子」のこの部分には、孔子自身は登場しない。もだえ苦しむのは子路である。そして、特に、その動きの中心は、老人に對する憎悪の感情にある。老人の論そのものに對して怒りを感じるのでなく、苦しむ孔子に對して義憤と、緊め付けられるやうな苦しさとを感じるのである。彼にはそういう不当さが許せないのである。私のいう義の意識の、一要素はそれである。

義には今一つの要素がある。それは、没利害の意識である。金錢觀の問題といつて良いかもしれない。孔子が子路に認めた最大の美点はこの「没利害性」ということであろう。また、「李陵」における司馬遷にしても同じ事がいえる。何の利得にもならない李陵のために弁じて、罰を受けても、彼はその受ける原因については苦しまない。「自ら願ひて嫉しくなければ、そのやましくない行為が、どのやうな結果を來たさうとも、士たる者はそれを甘受しなければならぬ筈だ。」そのように彼は思う。こういった要素をまとめて私はかりに義の意識と名づけてみたい。

第三にいう正直の意識とは、文字通り、うそ、偽り、ごまかしを厭う態度をいう。孔子の門に入つた子路は、それまでの乱暴を止め孝行をつくす。親戚中の評判で、褒められるが、子路は納得しない。「親孝行どころか、嘘ばかりついてゐる様な気がして仕方が無いからである。我儘を云つて親を手古摺らせてゐた頃の方が、どう考へても正直だつたのだ。今の自分の偽りに喜ばされてゐる親達が少々情無くも思はれる」のである。自分の偽りを偽りと考える、これが正直である。

親に對したこの場合は別として、その他の場合には、彼は決してゆづらない。そういう彼だから、いつも大きな壁にぶつかる。例えばこうである。「大きな疑問が一つある。子供の時からの疑問なのだが、成人になつても老人になりかかつて未だに納得できないことに變りはない。それは、

誰もが一向に怪しまうとしない事柄だ。邪が栄えて正が虐げられるといふ、ありきたりの事実に就いてである。此事実にぶつかると、子路は心からの悲憤を発しないではゐられない。何故だ？何故さうなのだ？」

彼にとって、そういう不正が憎悪の対象になる。彼はそれが許せない、許せないが故にそれにのめりこんでいく。全体をみる前に、もうその部分にこだわって動けなくなるのである。これも狼疾といえはしないだろうか。

こういった、恥の意識、義の意識、正直の意識の三つを総括して、士の意識と私は言いたい。男子として、ここまではゆずれぬが、ここからは決してゆずれない、そういう意識の世界を中島はもっていたと思うのである。恐らく、こういう意識の流れは、中島の生涯を通じて存在したと思われる。それは、儒家の出身の故かもしれない、あるいは、徳富蘆花の「思出の記」の全体に流れる奇妙な潔癖性や二葉亭四迷の中に存する正・直とか、男子畢生の仕事とかかったような意識などの底にみられる、士族の意識かもしれない。そして、この意識が、彼の甲羅を、彼の体質を作りあげていったのではないだろうか。

虫疾や狼疾は、結局はそういう士の意識の中ではぐくまれ、成長していったものともいえよう。この意味での武士と町民の文学の峻別は可能かもしれない。出身を云々するのではない、意識の問題としてである。

ともあれ、この構図をもう一度見直すならば、虫疾の陰に恥の意識があり、狼疾の陰に義や正直の意識が存するように思える。行動できないのは恥の意識のゆえであり、そこでじじめじめするのが虫疾である。ある、一部のものにこだわり、全体まで棄ててしまうのが義や正直の意識であり、そこで動けなくなるのが狼疾である。

衛の内乱に臨み、同じく孔門の出身で、衛に仕えていた子悉は素早く逃亡するが、子路は身をすて乱軍の中に突入していく。

「……冠が落ちる。倒れながら、子路は手を伸ばして冠を拾ひ、正しく頭に着けて素速く縷を結んだ。敵の刃の下で、真赤に血を浴びた子路が、最期の力を絞つて絶叫する。

『見よ！君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！』

（「弟子」）

結局、私のいう「士」の意識は彼の生涯をつらぬいて流れたものであると思う。その故に彼は虫疾を患う。あらゆる感情の表出や、素朴な没入が出来ない。彼は奇妙な矜持の姿勢を持つ。これは、広く考えれば、知識人におけるエリートと意識と、その挫折の問題にもつながるものである。そしてまた、その己れの性情に正直であろうとし、そのためには、己れの全体が崩れようともいとわれないという意識の流れを、狼疾と呼んできたが、このことは、実は、虫疾の対症療法として狼疾が起きてくるのだということにもなるのである。すなわち、狼疾によって虫疾を治そうとすることである。

話は、もう虫疾、狼疾の療法の問題に入らなければならない。

三

自我にこだわる心情を脱するためには、その自我をすてなければならぬ。しかし、それができないとすれば、今度は思いきってその自我に徹する方法がある。それが狼疾である。いわば、自我にこだわることに自己をかける方法である。それが、自我にこだわること、すなわち、虫疾に対してとった彼の最終的な療法であったといえよう。

しかし、現実には、方法的に一つのものに拘泥しすぎた。こだわり、こだわりした結果、彼は事物追求の徹底の際に起こる必然的な帰着点の一つとしての、「存在への疑惑」と「漠然とした不安」にとりつかれる。肩に

こだわり全身を失うように、彼はすべての存在にこだわり、その結果、すべてに對する素朴な反応の方法を見失うのである。

「一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る」(「文字稿」)
「自分の父をみてゐても、いつかその思いにとりつかれる。あの眼とあの口を、その他あの通りの凡てを備えた一人の男が『何故自分の父であり、自分と此の男との間に近い關係がなければならなかつたのか』、彼は愕然として父の顔を見直す。」(「狼疾記」)

その結果、その解明を期しながらも、彼はどんどんと深みにはまっていくなことなる。何も信じられない。そういう不信がいつか、観念としてでなく、彼の感覚として体内にしみついてくるような気がする。その彼にとつて、「自分自身の心から納得の行く・『實在に對する評価』が有ら度かつたのだ。曲りくねつた論理を辿つて見て、はては俺の存在は幸福なのだぞ、と、自分を説得して見ねばならぬ幸福なのは、仕方なかつたのだ」(「狼疾記」)ということになる。

カフカの「審」は彼にとつてきたえる。結局、あの脅迫観念にびくびくして、たえず正体の知れないものために防衛に専念する、宿命論的な恐怖の感に彼は同化していくのである。

彼は、観念からはじまり、殆んど身体の一部と化した不安と疑惑にたえずいらら悩まされる。

「わが西遊記」における沙悟浄の遍歴も、「北方行」における伝吉や三迷の迷妄も、その解明のためといえよう。

この形而上学的な不安の終極的命題の一つとして、冷徹な外界の悪意とでもいえるものを彼はおく。

武田泰淳氏はそれをこう記される。

「中島敦を魅惑したものは何物であつたらうか。例へばそれは、子が父を憎むこと、父が子を恐れること、はては子が父を殺すことなどであつた。これは暗い、ありうべからざるほどの暗い事実だ。人間があればほど大切に守つてゐるもの、その中に身を置いて安心し、そこにとじこもつて世間を眺められる堡壘のやうな倫理道德を、その石垣の一つ一つ、その煉瓦の一片づつを蝕み、ゆるませ、ホロホロと剝落せしむる事実である。」(「中島敦の狼疾について」)

氏の論ぜられる、こういった世界の底に、前述のような、意識の世界の変遷があつたことは考えておかねばならない。

ともあれ、この冷徹な外界の悪意とは、人と人との約束事である倫理道德を根底からくずしていくところの、人がずつと以前、原始の段階にもつていた、意識以前の混沌としたものに対する恐れを書いたものである。これは、魯の名大夫叔孫豹が、僂僂で、眼が深く凹み、獣のような突き出た口をした、全体が真黒な牛に似た感じの、わが子豎牛に殺される話である。病を得た叔孫豹は寵愛する、しかし後嗣にする意志はない豎牛しか自室に入れない。豎牛はそれをいいことにして、内外の連絡を勝手に変える。そのため、孫豹の他の二人の息子のうち、一人は殺され、一人は他國に奔らされる。ようやく気がついた叔孫が豎牛に疑いをかけるが、最早おそく、豎牛しか入れない部屋の中で、叔孫豹は食物ももらえない。誰かに助けを求めようとんでもその手段が無いのである。餓と病気で死にかけた叔孫豹がふと傍をみあげる。牛は人間離れのした冷酷さを湛えて、静かに見下している。

「其の貌は最早人間ではなく、真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物のやうに思はれる。叔孫は骨の髄まで凍る思ひがした。己を殺さうとす

一人の男に対する恐怖ではない。寧ろ、世界のさびしい悪意といった様なものへの、遜つた懼れに近い。最早先刻迄の怒は運命的な畏怖に圧倒されて了つた。今は此の男に刃向はうとする気力も失せたのである。」人間の意志の存在する悪意なら認める、反抗もする。しかし、これは運命的な外界の悪意とでもいえるものである。その前では人がいくらもがいてもどうすることも出来ない。

南洋の島々の風物抄的な「環礁」の中にある、「寂しい島」も、そうした命題を追求したもの一つである。その島にはここ数十年に子供が一人しか生まれていない。気候も産物も他の島と変わらないのだから子供だけが生まれないのである。二年前には三百近くいた人口は今では百七十八人にへっている。何故子供が生まれないのかわからない。しいて言えば、神がこの島を滅ぼそうと決意したからでもあらう。ひとり、渚を歩いていて、チラチラと足下を走る蟹に気づく。此の島の人間どもが死に絶えた後には、この小蟹どもが此の島を領するのであらうかと思うと、妙にうそ寒い気持がしてくる。そして、そういった現象を通して、「私は、人類の絶えて了つたあとの、誰も見る者も無い・暗い天体の整然たる運転を——ピタゴラスの言ふ・巨大な音響を発しつつ廻転する無数の球体共の様子を想像して見た。何か荒々しい悲しみに似たものが、ふつと、心の底から湧上つ来るやうであつた。」と彼はその世界への恐れをのべる。人間ののがれない運命が、また、外界のもたらす底知れぬ冷たい宿命的なものが、そこには冷然とひそんでいるのである。

傍見すれば、これは「観念の遊戯」であらう。勿論、こういう恐れを悟つたところで、それが何になるといったものでもない。私はここで文学や論理の有効性を論ずるつもりはない。問題は、中島の狼疾の度合いということである。現に狼疾を患っているのは、他でもない中島自身であるのだ

から。今は、ただ、そこに焦点をおきたいのだ。

形而上学的不安の終極的な命題の、もう一つのものとして、彼は天をおく。彼の形而上学的観念論の極点は、「天」の存在をおくことにより、自己の思考のよりかかる、最後の基本軸を決定しようとするのである。

「彼は地団駄を踏む思ひで、天とは何だと考へる。天は何を見てゐるのだ。其の様な運命を作りあげるのが天なら、自分は天に反抗しないではおられない。」

子路は悪の栄えるのをみるにつけそう思う。

同じ構図で逆の結果は、「李陵」に出てくる。胡地に捕えられ、想像を絶した困苦、欠乏、酷寒、孤独の中で、まるで、運命と意地の張り合いをしているかのように生きる蘇武。一体何のために生きているのか、何故自らの命を断たないのか李陵には不思議に思える。蘇武は、自分が再び漢に迎えられることは固より、自分がこんな無人の地で困苦と戦いつつあることを漢はおろか匈奴の単于にさえ伝えられるのを期待しない。誰にも認められず独り死んで行くに違いない。その最後の日に、自ら顧りみて、最後まで運命を笑殺しえたことに満足して死んでいこうというのである。李陵はかつて単于を狙いながら、その目的を果たすとも、匈奴の地を脱走しなければ空しく漢にまで伝えられないであらうことを恐れた自分とくらべてみて冷汗の出る思いがする。そしてこの蘇武の厳しさの前には己の行為に対する唯一の弁明であつた自分の苦悩がたまりもなく圧倒されるのを感ずるのである。

後、蘇武が、偶然に漢に帰れるようになった時、李陵の心は流石に動揺する。

「再び漢に戻れようと戻れまいと蘇武の偉大さに変りは無く、従つて陵

の心の筈たるに変わりはないに違ひないが、併し、天は矢張り見てゐたのだといふ考へが李陵をいたく打つた。見てゐないやうであるて、やつぱり天は見てゐる。」

療法の問題からすこし横道にそれたかの感があるが、私なりにいえば、この形而上学的不安の終極的な命題の追求そのものが、狼疾の重要な対症療法であると思うのである。このたえざる追求によって、中島は単なる知識人的なニヒリズムやディレッタントンティズムを脱するエネルギーを得たのではないかと思われるのである。いわば、狼疾体質に対する狼疾療法とでもいえよう。

四

結局、中島に対する、最終の評価の軸はここにあるように思われる。「わが西遊記」で中島の作りだした世界は、里見淳の「三人の弟子」や、田中英光の「我が西遊記」と比較するまでもなく、中島特有の凜然とした文体と、それに支えられた人間形成小説の見事な結晶として、その価を認めた。がしかし、これらの作品は「狼疾記」や「かめれおん日記」と同様の体質を有する。そして、それ故に、やはり何らかの知識人特有の卑劣な自己肯定、自己正当化が見られるような気がするのである。中島のことばでいえば、この儘では、「何処か、(非常に微妙な点に於て) 欠ける所があるのではないか」(「山月記」)、そのようにも思われる。

しかし、その自己肯定が、自己肯定としてはっきりした自我に支えられて確立してしまうと、その評価はまた違ってこなくてはならない。そして、そのこととなるのが、狼疾といえはしないだろうか。

つまるところ、中島の作家として評価の論定はそこにあるといえよう。

私自身に関して、今一つつけ加えれば、中島がいかに生きたかというところが、また、向後の私のいかに生きるかの問題にもつながってくるのであるが、それを論ずる紙幅はすでに早くからない。